

マタイ 10 : 34-42

「周囲との衝突に立ち向かう」

10:34 わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思っはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。

10:35 なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。

10:36 さらに、家族の者がその人の敵となります。

10:37 わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。

10:38 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。

10:39 自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとします。

10:40 あなたがたを受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。また、わたしを受け入れる者は、わたしを遣わした方を受け入れるのです。

10:41 預言者を預言者だというので受け入れる者は、預言者の受ける報いを受けます。また、義人を義人だということで受け入れる者は、義人の受ける報いを受けます。

10:42 わたしの弟子だというので、この小さい者たちのひとりに、水一杯でも飲ませるなら、まことに、あなたがたに告げます。その人は決して報いに漏れることはありません。」

### はじめに

先月は、私たちの心や考えなど内側で起こる戦いについて学びました。これらの戦いは、日常生活や特別な宣教旅行でイエスに仕えようとしたときに起こります。

そのときに、肉体的な迫害も、中傷も拒絶も恐れてはならないと学びました。

今月の個所で、マタイは周囲からの攻撃について教えています。

この個所のイエスの教えを理解するカギは、24 節をしっかりと理解することです。

### マタイ 10 : 34

10:34 わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思っはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。

このみことばは、あらゆる理由で重要です。

まず、当時のユダヤ人は、地域を支配していたローマ帝国の兵士たちをイエスが追放して、イスラエルを解放してくれると期待していました。

また、イエスが平和と繁栄をもたらしてくれると思っっていました。

そのように考えたのには理由があります。旧約聖書の預言がすべて、救い主がどのようなお方で、何を成し遂げられるかを指し示していたからです。

イザヤ書 9 : 6 には、救い主イエスが「平和の君」となられるとあります。

多くの現代人は、キリスト教の教えが成就しなかったと考えるかもしれません。イエスが平和の君だと言うなら、キリスト教の教えは実現しなかったのだろう、と考えます。

今も世界中には戦争などの苦しみや不正がはびこっています。

家庭内にも不和があります。

イエスがこの世に「平和」をもたらすために来られたのなら、その使命は果たされなかったのです。

人間的に理解するなら、34 節でイエスのご自身の使命と働きについて非常に否定的なことをおっしやっています。

「平和」をもたらすために来たのではない、分裂の剣をもって来た、とおっしやっています。

このイエスの教えを、私たちはどう理解すればよいのでしょうか。

まず、イエスが来られたのは、心に感じる平和をもたらすためだ、ということを理解する必要があります。

イエスは、人間が考える平和ではなく、霊的な平和を約束なさったのです。

イエスは、人間を土台とする平和ではなく、天国を土台とする平和を提供してくださいました。

#### ヨハネ 14 : 25-27

14:25 このことをわたしは、あなたがたといっしょにいる間に、あなたがたに話しました。

14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。

14:27 わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。

イエスが現代の私たちに与えてくださる平和は、罪の赦しを得て心に生まれる平安です。

この平安を私たちに得させるために、イエスはご自身のいのちを差し出し、人の手によって殺され、天の父に罰せられました。

イエスは、私たちの罪に対する罰を受け、神の御怒りを受けて苦しみました。

この世に現在も平和がないのは、この世の国々が神のみこころに心と人生を明け渡そうとしないからです。

たいていの人は、創造主なる神との心の平和を差し出されても、それを拒絶します。

創造主を尊ぶ生き方よりも、身勝手に目先の快楽を求める生き方を選びます。

イエスは、どの時代も世の中が分断された状態であることをご存知でした。

それは、心に平安を得てイエスについていこうとする人たちと、イエスが与えてくださる平安を拒む人たちの間に起こる分断です。

心に平安を得てイエスについていくには、どのクリスチャンも犠牲が伴います。

それは、分断と争いを起こす剣のようなものです。

イエスはこの個所で、私たちが神の赦しを求めて心に平安を得ると、人生にふたつの別離が起こると教えておられます。

第一に、私たちの家族をはじめ、大切な人たちとの決別です。（35-37 節）

第二に、この世との決別です。（38-39 節）

最後にイエスは、イエスに従って生きることに人生をかけるなら、永遠の報いを得ると励ましてくださいます。（39-42 節）

#### 1. 家族や大切な人たちとの決別。（35-37 節）

今では、クリスチャン家庭という恵まれた環境で育った人は少ないでしょう。

献身的なクリスチャンの両親がいる人は、とても恵まれています。私の周囲でも、ほとんどのクリスチャンは、両親はノンクリスチャンです。

クリスチャンになると、親兄弟や親せきと信仰の異なる場合、問題が生じます。

その問題とは、人生に対する姿勢、考え方、動機が違うことです。

自分が望まなくても、新生して、神の家族という新しい家族の一員となったことで、分断が生まれます。

親兄弟や親せきを大切に思わなくなったというわけではありませんが、他のクリスチャンと理解し合えるようには、もう共感できなくなります。

イエスがここで私たちに出される課題は、常に神のみこころと神の家族を救われていない家族以上に尊重することです。

聞くのがつらい課題です。

主の働きに対する私たちの愛が、家族に対する愛よりも深くあってほしいとイエスは望まれます。

クリスチャン家庭で育った人でも、なかなか難しい課題です。

イエス・キリストを人生の主とする決心をすると、その他のすべては二の次になります。

イエスを主とすることを拒んで二の次にするならば、一番大切にしたい人物は偶像になってしまいます。

イエスよりもその人を愛していることになります。

イエスは続けて、「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません」とおっしゃいます。

つまり、救いの価値をわかっていないということです。

イエスより家族を第一にするのは、救いをふさわしく評価していないのです。

イエスがこう言われたとき、預言者ミカの言葉から語っておられました。

### ミカ書 7 : 5-7

7:5 友を信用するな。親しい友をも信頼するな。あなたのふところに寝る者にも、あなたの口の戸を守れ。

7:6 息子は父親を侮り、娘は母親に、嫁はしゅうとめに逆らい、それぞれ自分の家の者を敵としている。

7:7 しかし、私は【主】を仰ぎ見、私の救いの神を待ち望む。私の神は私の願いを聞いてくださる。

ミカは、当時のユダヤ人に語っています。彼らは罪に陥っていました。それで、救いや永遠のいのちを与えてくれるのは家族や友人ではない、神ご自身だと教えました。

これまで、多くの宣教師やクリスチャンの働き人が外国の地で仕えるように神に召されました。

彼らは、イエスとその働きを家族の願いよりも優先させることを心得ていました。

私たちはどうでしょう。

家族よりもイエスを第一にする覚悟がありますか。

実際に神に試されるまでは、本当に覚悟ができていくかわかりませんが、神のみこころにゆだねることはできます。そうすれば、何か起こった時に、イエスに従おうと思えるでしょう。

1988年に宣教師として来日するために英国を離れたとき、私たち夫婦にとって以上に、母や兄弟にとってつらかったと思います。

私たち夫婦は、3人の子どもたちも日本に連れてきて、4人目は1991年に神戸で生まれました。私たちは家族一緒でした。

けれども、4年前に日本に戻るように神に召されたときは、そのときよりもつらかったです。

4人の子どもたちと孫たちを残して来なければならなかったからです。

もちろん私たちは、子どもたちよりもイエスを愛しています。だから今、ここ OIC にいるのです。

それが唯一、今私たちが日本にいる理由です。

## 2. この世との決別。(38-39 節)

イエスは 38-39 節で、イエスにつき従うには犠牲があることを明らかにしておられます。

イエスについていくには、自分の十字架を負わなければならないとおっしゃいます。

今の時代、十字架にはキリスト教の象徴である以外に大きな意味はありません。

けれども当時、十字架は死を意味しました。

木の十字架に釘で打ちつけられ、ゆっくりと死んでいくのです。残酷な死に方です。

イエスについていこうと思うならば、古い生き方も願いも情熱も殺して、イエスに従う弟子としての新しい人生を生きる覚悟が必要だとイエスは言っておられるのです。

このような生き方は、当時も今も、いつの時代でも、世の人に逆行する生き方です。

### 箴言 14 : 12

14:12 人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。

このように語られたイエスの教えを、イエスの兄弟ヤコブは、はっきりと理解していました。

## ヤコブ 4 : 1-6

4:1 何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょうか。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか。

4:2 あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをします。うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのは、あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。

4:3 願っても受けられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。

4:4 貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。

4:5 それとも、「神は、私たちのうちに住ませた御霊を、ねたむほどに慕っておられる」という聖書のことばが、無意味だと思うのですか。

4:6 しかし、神は、さらに豊かな恵みを与えてくださいます。ですから、こう言われています。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。」

私たちがクリスチャンになった瞬間に、神の目には違って映るのです。

神は私たちを義とみなしてください。それは、イエス・キリストが私たちに代わって犠牲となり、死んでくださったおかげです。

イエスは私たちの身代わりのいけにえです。

しかし、この世で起こるすべての事柄の中で、この世と決別するのは毎日の課題です。

現在の欧米諸国では、クリスチャンが世俗に譲歩したかたちの福音伝道に関する考えを持っています。そうすると、クリスチャンはこの個所に記されたイエスの言葉を真剣に受け止めなくなります。

「私の人生設計をじゃまされない限り、イエスについていく」とか「やりたくないことをするよう召されない限り、イエスについていく」というのが本音のクリスチャンがたくさんいます。

自分でついていく限界を決めているなら、口でクリスチャンだと言っても、あなたは本当にクリスチャンなのでしょう。

この問いに答えられるのは、あなた自身だけです。

多くのクリスチャンが気づいていないのは、イエスの要求されるとおりのクリスチャン生活を送れば、人生をかけずに宗教を信仰する生活よりも、人に対する説得力が大きいということです。

イエスが私たちを召しておられる弟子としての人生は、私たちにとって良い人生ですが、それだけではありません。そういう生き方とおして、傷つき、真理と愛と平和を求める世の中に最善の証を与えることができます。

イエスが望まれるように生き、この世と決別して神にすべてを明け渡すなら、私たちの心を変えた福音のメッセージに人は耳を貸すでしょう。

今日、イエスが私たちに語っておられることは、世界中の多くの説教者が教えることとはずいぶん違います。

けれども、私は確信を持って言います。イエスは 100%真実で正しいお方で、このテーマの教えについてもそうです。

問題は、イエスが教えられたとおりに私たちが福音を理解しているかどうかです。

### 3. イエスと過ごす永遠のいのちのための決別。(39-42 節)

イエスは、イエスにつき従うことについて弟子たちに教えられました。

そして、ふたつめの説教を励ましのことばで締めくくられます。イエスのために失うものやあきらめるものではなく、将来の長期的な益に目を向けるように、と弟子たちに語られました。

イエスのためにすべてを捨てたとき、よりよいものを見いだすと言っておられるのです。

目先だけを見れば、私たちはこの世のものを失うかもしれません。けれども長期的に見れば、報いがあります。

イエスは必ず、弟子の必要を満たしてください。

42 節は興味深い内容です。イエスに従う弟子たちに対する報いだけでなく、フルタイムで仕えるクリスチャンの働き人を支えるよう召された弟子たちにも報いがある、という内容です。イエスはすでに、福音宣教に携わる働き人には支援者が必要だと語っておられました。イエスの弟子とは、外に出ていく宣教師だけではなく、出かへず祈ってささげる宣教師もいます。その人たちも同様に大切です。そして、イエスの報いを得るのです。

### まとめと適用

今日、聖餐式に与るにあたって、私たちに代わってイエスがなして下さった業の尊さをどれほどわかっているかしっかりと考えたいと思います。

つまり、聖餐式は私たちにとってどれほど意味があるか、ということです。

私たちは、本当に大切に思っているでしょうか。

私たちひとりひとりの弟子としての生き方が、たましいの救いのためにイエスが死んで下さったことを大切に思う度合いを示すでしょう。

### コリント第二 5 : 21

5:21 神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためです。

### コリント第一 15 : 55-58

15:55 「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」

15:56 死のとげは罪であり、罪の力は律法です。

15:57 しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。

15:58 ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあつてむだでないことを知っているのですから。